

ワークショップの裏側から

阿尾, 安泰
九州大学大学院言語文化研究院 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/7318909>

出版情報 : 言語文化論究. 53, pp.53-60, 2024-11-05. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



ワークショップの裏側から

阿 尾 安 泰

はじめに

ワークショップを企画した。2023年10月28日、日本フランス語フランス文学会秋季大会でのことである。タイトルは、「もやもやの開く地平」でパネリストとして佐藤（平岩）典子、鈴木隆美、Charlène CLONTS の諸氏の協力を仰いだ。九州大学主催で開催された全国大会ということであり、九州の研究者の水準の高さを示したいという思いがあった¹。ただ小生はパネリストではなく、コーディネーターという役割に徹したため、他人の輝で相撲を取ったという感は拭えない。そこで、このワークショップが終了した時点で、その企画に至った背景を説明してみたい。

1. 構想について

ワークショップ企画については、学会事務局には、主として以下の3点からなる説明を行っていた。

①コンテキストの探求

21世紀も20年以上が過ぎようとしている中で、もう一度現代文学、現代思想の置かれてきたコンテキストを問い返すことを試みてみたい。これまで様々なビッグネームにより、センセーショナルな話題には事欠なかった。たとえば、フーコーの「人間」、アルチュセールの「国家イデオロギー装置」などがすぐに浮かぶ。ただそうした大物たちのオーラが衰えていくと、問題意識の希薄化、紋切り型への変貌はさけられなかった。ブームの忘却は世の常としても、そうした文学、思想の動きを牽引してきた動きまで記憶から消されて、いいものだろうか。確かに祭りがずっと続くのも、よくないだろう。祭りのあとの落ち着いた日常が必要であり、実際現在では、着実な個別研究が進行している。ただ祭りを忘れたとき待っているのは、怠惰な日々が重なるだけの不毛さへの転落である。大きな動きとの関連を問わなければ、研究は自己満足のタコツボに陥る危険が常にある。

②境界線上の問いかけ

今回時代の動態を、有力な思想家たちがそのキーワードによって明らかにして行っただけとは、異なる方向から考えてみたい。文学の方から個別的な作品の読解を通じて、そこに働く時代という場の影響圏に迫ってみたい。たとえば、境界線上での問いかけがあるだろう。存在、不在の狭間における探求である。二者択一式の問いをあえて立てながら、一義的な解答を引き延ばすような試みも存在するだろう。曖昧さの戦略とも言える。またテキスト間の境界を越えて、引用という形で相互に関連付けを行いながら、新たな言語文化空間を構築していこうとする動きもあるだろう。さらに時間の探求のなかで、そこで形成されていく主体という場のトポロジーを問うことも可能である。

そうした試みを通じて、言語文化空間がどのような条件のもとに構築されていったかを追求してみたい。

③新たな時代との関係性において

こうした探求を行う背景にあるのは、新しい時代の到来の意識である。たとえば、chatGPTなどにみられるデジタル文化の浸透は想定以上のものがある。こうした動きにたいして、これまでどのようなコンテキスト、条件のもとに探求が行われてきたのかを意識化するのは重要な作業だと考えられる。そうした問いかけがなければ、現在の見方を過去にそのまま無自覚に適用してしまう愚を犯してしまう恐れが存在するからである。前述の二項対立図式なども0と1の二項処理を越えた量子コンピューターが完成してしまえば、技術的能力の未熟さの問題とされかねない。そうした誤解を避けるためにもこうした作業がどうしても必要になると考えられる。

こうした構想のもとに、前述の3氏に協力を仰ぎ、刺激的なワークショップを行うことができた。この企画が好意的な評価を受けることができたのは、ひとえに発表のレベルの高さによるものであった。3氏は、それぞれ方法は異なるものの、評価が定まったかに見えるポスト・モダニズムの問題群を安易に切り取ってまとめることもなく、引き続き探求の射程に置き続け、研究を続行してきたように筆者には思えた。そうした姿勢があるからこそ、ワークショップへの協力を依頼したのであった。終わっていないポスト・モダンの問題提起を、今新たに登場しつつある新しい課題へと接続してみたかったのである。

ワークショップにおいて、Clonts氏は、Déborah Heisslerを中心とした言語文化活動に注目しながら、境界線を顕在化させる中で、その限界と戯れていく前衛性を明らかにしようとした。また鈴木氏は、アントナン・アルトーの身体と言語の関係を出発点として、Chat GPTにおける記号の問題に新たな視点を投げかけようとした。佐藤氏は、文学研究における作者の問題が、アングロ・サクソン系の文化圏において、フランスとは異なる展開を示していることを提起し、一括りにはできない文学研究の問題点を明らかにすることを試みた。それぞれが刺激的な発表だった²。以下において、3氏たちとは異なる方向から、従来の問題の問い直しとそこからの展望を考えてみたい。

2. コンテキストの忘却

このワークショップの企画に至るまでには、一つの体験が大きな影響を及ぼしている。或る大学の面接試験に立ち会った時のことである。「国家イデオロギー装置」について説明を求められた受験生が語り出した。明解で、内容的にも問題がないように思えた。ただその時ある種の違和感を感じた。彼の説明には、アルチュセールがその概念を提出せざるを得ない状況、コンテキストに関する言及がないのであった。まるでこの思考装置が真空の中から、何も干渉するものがないような状態の中から、立ち現れてくるようであった³。

そんなことを問う必要などない。概念の構造を明確に把握していることが重要だという意見もあるかもしれない。ただ発生の問題を回避して、「明確さ」を求めようとするとき、そこに現れるのは、明確化（clarification）のプロセスというより、単純化（simplification）の過程ではないだろうか。それでは明確化と単純化はどう違うのかと言われそうである。どちらも、混乱した状況を見やすくする点ではそれほど変わらないのではないかと意見も出てきそうである。うまく整理されない明確化が単純化になるのであり、この両者はひとえに完成度の程度によってのみ分けられるのではないかという立場も現れるだろう。

こうした明確化と単純化が同じ過程に属するという見方とは一線を画したい。単純化とは、課題が問われているコンテキストが忘却されるときに出現するものである。なぜこのような問いかけがなされているのかを考えることをせず、ひたすら解答を求めようとするものである。そのような方向ばかり歩んでいると行先だけが気になり、どうして自分がその道を歩き出したのかという根本が忘れられてしまう。課題というのは、どのような結末を導き出すかということも大事であるが、何故そうした課題を立てたのか、そしてそれを規定する自分の視点自体を問い返す姿勢がどうしても必要である。それがなければ、自己を規定する認識の枠組みを意識化することができず、盲目的に同語反復の罠に陥ってしまうだろう。

もう少し具体的に述べてみよう。実はこのワークショップの元々のタイトルは、「もやもやという戦略の開く地平」というものであった。確かにこの題名は、「もやもやの開く地平」よりは、わかりやすい印象を与える。「戦略」という語を付与するだけで、議論の進み方が予想できるような印象を与える。しかし、ここで考えてみよう。そのとき与えられる明快さとはいかなるものだろうか。重要なのは戦略であり、それを頼りに導き出される結論となろう。その時「もやもや」なるものは貴重な成果を導き出すためのきっかけにすぎず、結果がでた暁には消え去る運命だろう。そうした方向をとる限り、「もやもや」を消していこうとする「戦略」自体を問うことも、そうした前提が探求を支えていることを自覚することもない。多くの成果が生み出されるにせよ、そのプロセス事態を無自覚に受容しているとすれば、大きな問題点が存在するのではないだろうか。

このワークショップで主題としたかったのは、むしろ「もやもや」そのものであり、そうした視座を設定することで問題を解決しようとする従来の仕方の再考を試みたかったのである。言い換えれば、「戦略」という枠組みが出現するコンテキストを考察するということである。確かにこの語をワークショップのタイトルからはずすことで、わかりやすさは失うことになるだろう。しかし、そうすることで、そうした「わかりやすさ」なるものが、いかなる条件のもとで出現してくるのかを問う探求の方向性は確保できると考えた。了解の地平を漫然と設定するのではなく、その地平そのものの成立を問題としたかったのである。

なぜこれほどコンテキストにこだわる必要があるのだろうか。例えを用いながら、考えてみよう。ここに遊泳には適さない海があるとする。ただ動きの激しい水流は深いところにあるため、見た目はそれほど危険とは思えなかった。そのため当初は監視員を置いていたが、ある時から人員が配置されなくなった。すると海の状態は変わっていないにもかかわらず、見張る者がいないことで、何か普通の安全な海のように見えてしまう状況が現れた。海が持っていた危険性が忘却されて、あたかも無害であるかのような事態が生まれてしまう。これと同様に構造主義でも、それが出現した時の条件を忘却してしまえば、この思想が持っていた挑発性などは失われ、誰でも使える無害な安全な道具のように思えてくるのではないか。そうした懸念が、コンテキスト重視の立場を選択させるのであり、明確化と単純化の峻別に導くのである。

3. ドラマよりはレゴ

このコンテキストの重視ということは誤解を生みやすい。ただ細部を充実させていけばよいと思われかねない。概念誕生時の細かな事を綿々とつなげていけば十分ということではない。懐古趣味ではないし、当時を知る人の話をしっかり聞けということではないのだ。確かに真実味のあるドラマを創り上げようとするならば、大きな流れに、それを取り巻くような様々な要素を付け加えてい

きながら、重厚な全体像を構成することが大事となろう。細かな事実の集積が重みとなって、全体がより完成度を増していくように思われる。

しかし、問題としたいのはそうしたことはない。著書執筆時の作者の状況、その時の社会の情勢など、確かに重要な要素かもしれないが、それだけに限定していいのだろうか。楽屋裏が明らかになっても、事態が解決するというものではないのである。細部が浮かび上がれば、自ずと全体の姿が明瞭になるのなら、話は簡単であろう。瑣事にただ拘泥するだけで、本当にコンテキストは明解になるのだろうか。そこでドラマよりはレゴを重視したい。レゴはご存知のように、ブロックを組み合わせることで立体的な造形を目指していく玩具である。コンテキストをブロックの構成からなるものと考え、どのような種類のブロックが組みあわされるのか、またその際の条件とは何かを考えていくのである。

ではドラマ方式とレゴ方式でどのような点が異なるのだろうか⁴。全体を構成する点では、どちらも同じではないかという疑問が出てくるかもしれない。重大な相違は、ドラマ方式の方は、ドラマという目標を設定している時点で、連続的な大きな流れが想定されている事である。付与されていく細部は、その流れに寄り添うものである。その流れから大きく逸脱することは考えられない。流れを豊かにすることはあっても、それを断ち切ることはない。こぼれ話、思い出話をいくら盛るとしても、それらが想定される壮大な物語の過去の要素となる限りにおいてである。それに対し、コンテキストの忘却という視点を強調する時求められるのは、豊かな「過去」の再現ではなく、「過去」なるものの生成のプロセスである。そして、一度「過去」が生み出されると、その成果の方に注目が集まり、それを生成したプロセスの方は忘却されていくという事態を問題としたいのである。

イメージに頼った比喻で述べていこう。ドラマの方は川の流れという形で考えてもらおう。水は一度流れ込めば、場を一様に潤す。問題となるのは、その均質な流体がどちらに流れていくのかということである。流体の連続性と運動が鍵となる。レゴはそうではない。ある空間に構造を持った立体が出現するのである。その立体と空間とは様々な関係を取りうる。それは、全てが均等に埋め尽くされた水の世界とは異なる。空間は、現前するマチエールとそれが場を占めていない不在との関係により、特性が決定される。存在と不在との関係性が重要となってくる。レゴのパーツは全てを埋め尽くすことを目指してはいない。レゴ的視点は、その構造の発生の過程と構造の外部の空間との関係を問う契機を与えてくれる。

言い換えれば、時系列的な（クロノロジックな）探求よりは位相論的な（トポロジックな）探求が重視されるべきだろう⁵。現状を踏まえて、現代から遡行的に起源を問うというよりは、そうした状況を成立させている条件を構造論的に分析していこうとするのである。そうしたアプローチは、関係を持ち得なかった他の要素の存在を想起させ、なぜ生成の過程において選択されなかったかという問題を新たに提起していくことになる。レゴにおいて、モデルの形成過程において、必ず使われなかったパーツが残るのと同様である。使われなかったものにも注目することをレゴ的なアプローチは教えてくれる。そうした方向を推し進めていけば、記憶に残るもの、記録されたものだけに留まらず、記憶に残らず、記録もされないものにまで探求を行うことになる。今かつての思想運動を問い返すとすれば、明らかとなっていることから構成されている解釈を、不在とされてきた事象から読み返すことが求められるだろう。すでに回収されている現代思想をめぐる答案用紙に新たなものを付け加えるとしたら、こうした方向が考えられるだろう。そうした連携的な問いかけの延長線上に、現在の在り方を生成したメカニズムが浮かび上がってくることになる。

4. 「新しい…」

では、これから提出されようとする答案用紙には新しい解釈、読解が書かれているのだろうか？ そうでなければ、提出する必要などないではないかと言われそうである。ここで「新しい…」という形式について考えてみよう。

従来の見方の問題点を批判して、それとは異なる視点を提示することは、極めて建設的のように思えるし、そうしたアプローチが数々の成果を生み出してきていることも我々は見てきた。新しい歴史観、新しい人間像、新しい自然観などが提起されてきた。古い歴史観、人間像、自然観が批判され、乗り越えられたわけである。ただし、問題の展開の仕方は、それに尽きるのだろうか。

こうしたアプローチにおいては、前半部に重点がある。「新しい…」は「古い…」より勝るわけであり、また一見すると「新しい…」に思えても実質的に「古い…」は批判されたりする、もちろん「古い…」と思われていても実は「新しい…」なところがあれば再評価されたりするわけである。要するに前半の「新しい…」「古い…」が判断の基準となる。

では、後半部「…」は問われる必要はないのだろうか。それに答える前に、迂回をしてみよう。孫悟空の話である。孫悟空はお釈迦様と論争をして、地の果てまで行ってきて、その証拠を果てにある柱に残してきたという。するとお釈迦様はお前の言う柱とは、これかと言って、自らの指を見せる。孫悟空のいう果てしなさは、お釈迦様の手の中にあったという逸話である。別に孫悟空の愚かさを言いたいのではない。新旧の論争が、論争の土台そのものを問えない恐れを指摘したいのである。新旧の長所、短所をいくらあげつつらっても、そうした議論を支えている構造そのものを問えないならば、同じ世界を動き回るだけの盲目的な同語反復の罠に陥る恐れがある。お釈迦様の手を意識してこそ、お釈迦様の全体、およびそれを取り巻く世界とその外に目が行くのではないだろうか。

例えば、現在エネルギー問題について、石炭、ガソリンなどに代わるものとして、電力、風力、地熱、水素などが話題となっている。ただし、それは現在の交通手段ということを前提にしたうえでの話である。ただし、この議論の土台をずらして、宇宙空間ロケットなどに変われば、風力、電力などは選択肢からはずれてしまうだろう。また未来の夢物語かもしれぬが、タイムマシンなどを想定すれば、全く異なる議論が生まれてくるだろう。新旧という選択肢は、後半部の議論の土台との連関の中で考えられるべきだろう。

こうした流れの中で、いわゆる「新しい歴史観」、「新しい人間像」、「新しい自然観」を見直してみよう。注意すべきは、「歴史」、「人間」、「自然」というものがあたかも不変の土台のようにみなされていることである。様々なアプローチを可能にする母なる大地、時ともに数々の変遷を経ながら形成されてきた強固な存在のようなものとして考えられている。そうした見地からすれば、問われるべきは前半部だけとなるだろう。今こそ、後半部を不変と考える、永遠性の神話と手を切るべき時だろう⁶。アプローチによって、対象の方も姿を変えてくるのである。この両者の相互影響関係においてこそ、認識の場が決定されていくのだろう。決して一方向からの光によってだけ、対象の隠されていた姿が一挙に明らかになるわけではない。

今や求められるべきは、単なる「新しい視点」ではないだろう。そうした視点を可能にする場の状況を明らかにし、異なる場の出現に向けて探求を進めることだろう。新旧の違いだけに満足していれば、解釈の同語反復を行っているだけで、そうした展望を可能にする条件などが問題とされることはないだろう。先ほどの例でいえば、孫悟空がひたすら飛び回り続ける世界である。お釈迦様に呼びかけ、孫悟空とお釈迦様が織りなす空間を出現させ、その外を志向しなければならない。そ

うした過程を経てこそ、他の物語の可能性が生まれてくるのではないだろうか。

結び：更なる探求とは？

ワークショップの構想、それに付随する考察を経た今、これから進むべき方向について語るべきだろう。少なくともこれからの展望を可能にする3つの問題が浮かび上がってきたように思われる。可視性、言語、制度である。

Clonts氏が指摘するように、現代芸術における存在、不在の境界線、現代言語文化空間の独特なあり方などは、その探求において可視性を主題の一つとしている。見る事が表現において、重要な役割を果たすのである。もちろんその可視性は、写真、映画などをはじめとする新しいメディアの登場そして科学技術の発展とともに大きく姿を変えてきている。その変貌を踏まえた上で、可能性を増してきているのである。

アントナン・アルトーの身体と言語の関係を分析した鈴木氏が示したように、Chat GPTが登場した現代においても言語というものは、大きな問題となっている。特に強調すべきは、言語が可視性と結びつくことで、これまである種の秩序を持った言語文化空間を形成してきたということである。ただこの言語の表象性と可視性が形作ってきた論理構造にたいして、デジタル文化が新たな挑戦をしかけていることも周知の事実である。そのあたりを鈴木氏も指摘したのである。こうしたあたらしい動きの中で、何が生み出されるのかが注目される。

また佐藤氏が文学研究における作者の問題で明らかにしたように、文学とは単なる審美的な対象ではない。目指す価値をめぐっての探求は、そうした行為を可能とし、是認し、拡大していこうとする言語文化空間の成立をめざしては考えられない。そうした環境の生成を問わねばならない時、制度論的なアプローチが生まれてくる。アングロ・サクソン系の文化圏が、フランスとは異なる展開を示すとき、国民性の違いをあげて事足りるとすべきではないだろう。表面的な相違をあげつらうことで、それを支えている複雑で広大な価値体系のネットワークの存在を忘れてはならないだろう。

こうしたキーワード、可視性、言語、制度を踏まえて、どのように進むべきなのだろうか。それについて詳しく述べることは、別の機会にしたいが、その方向性だけは確認しておきたい。すでに、コンテクストの重要性については述べた。そこで、これらの語を個別的に論じていこうとは思わない。重要なことは、現在の時点において、これらの語が共存して、互いに影響を及ぼしていることである。この共存関係が規定する場の姿を問うことが求められているのである。そのように強調するのも、これらのことを個別に論じることは、それほど難しくないし、むしろきわめて「自然」に思えてしまうところさえあるからである。例えば、可視性についても、18世紀における科学技術の進歩は各分野での情報量の増大を生み出すと共に、その迅速な流通と幅広い領域への浸透拡大を促そうとした。例えば、百科全書の出版などはそうした動きをよく表すものであるし、そこに付与された図版などの果す役割は大きなものがあつた。そしてそうした知識の拡大は19世紀においては、写真、映画などといった新しいメディアをもたらすことになった。そうした叙述を取れば、18世紀から19世紀を経て、現代にまで至る視覚文化の発達を考察することができよう。可視性というテーマで大きな流れを記述できるかに見える。ただし、そこにおいては、可視性だけに光が当てられ、どのようなコンテクストでこのテーマが問題となっているかが見落とされている。

忘れてならないのは、我々がレゴ的なアプローチを選択したことである。共存する諸要素間の関係を考察しなければいけない。可視性といっても、18世紀と19世紀では大きな違いがある。もちろ

ん、写真や映画といった新しいメディアの登場もある。しかし、それ以上に、可視性を支える原理が19世紀において大きく変化したことを忘れてはならない。例えば、この時代に発見されたX線の影響がある。X線は人間の目には見ることができない。しかし、この不可視の光線を介してこそ、人体の最新部が可視化されるのである。不可視のものにより、可視化されるという、いわば逆説的な状況が生じているのである。これは、視線の精度を高めることを至上の目的とした、肉眼をモデルとしたそれまでの可視化のプロセスとは全く異なるものである。この点を考慮すれば、安易に18世紀と19世紀をつなげてはならないだろう。可視化を取り巻く状況が全く異質なのである。実際、可視化におけるこの揺らぎは、言語の領域にも影響を及ぼす。これまで言語は対象となるものを的確に表現する透明性を基盤としてきた。しかし、本当に重要なものはそうした透明性に回収されないもの、言語化し得ぬものにこそ価値があるのではないかという動きが生まれていった。表現され得ぬもの、不在のように見えながら存在を感じさせるもの、そうしたものに関心が向けられて行った。こうして、各キーワードが混然一体となって現代言語文化空間を形成している。レゴがブロック間同士の結合をつうじて大きな全体を形作るように、キーワードは様々なレベルごとに独自の関係を構成しうるのである。そうした複雑な構造を、連続した、大きな流れのもとに解消してはならないだろう。

最後に確認すべきは、こうした探求を経て我々が目指すのは、いわゆる「新しい見方」ではないということである。そうした方向を避けようとするのは、新旧を判断しうるような統一的で絶対的な「見方」が存在することが前提とされているように思えるからである。だからといって、どのような「見方」も同じで、等価値だというわけではない。すでに述べたように、「作者」というテーマにたいして異なる対応をするフランス語文化圏とアングロ・サクソン文化圏にたいして、優劣をつけることは無意味であるし、またどちらも同じ文化の多様な諸側面のひとつを示しているにすぎないと強引にまとめるのも建設的ではないだろう。この差異は、文化をめぐる複雑な構造の中から出てくるものであり、その個別性、特殊性を安易に一般性なるものに解消してはならない。そうしたことを踏まえなければ、なぜフランスではなく、イギリスでカルチュラル・スタディーズが生まれたのか、どうしてイギリスではなく、フランスで、5月革命が発生し、構造主義と錯綜した関係を取ったのかというような複雑な課題に的確には対応できないだろう。認識、行動の基盤となるものの構造、人々にごく「自然」に、その影響を意識させることなく判断をさせているものが問われるだろう。

こうした中で、これから取り組むべき読解の試みの輪郭があきらかになってくる。可視性、言語、制度の3つのキーワードの中で重点を置くべきは可視性であろう。すでに述べたように、このテーマを選べば、18世紀から19世紀を経て、現代にまで至る視覚文化の発達なる問題を提起することができ、そのアプローチに潜む、コンテクストを軽視した悪しき歴史主義を批判することができるからである。その問い返しを通じてこそ、可視性がほかの要素と結ぶ独自の構造を明らかにすることが可能となる。可視性を支える構造は、18世紀、19世紀、20世紀、そして現代において異なっているのである。ここでその相違する構造を結びつけようとして、大きな流れを想定するような新たな歴史主義に陥ることは避けるべきだろう。異なる構造を生成した諸条件の遭遇を分析しながら（それは同時に遭遇しえなかった諸条件の分析も含むことになるが）、新たな構造の出現の可能性を模索することは許されるだろう。そうした可能性にむけてこそ、今後の探求は開かれていくだろう。

注

- 1 このワークショップについては、日本フランス語フランス文学会発行の *Cahier*33号（2024年3月）でレジュメを見ることができる（pp.14-21）。当日の音声も以下のアドレスから聴取できる。
https://drive.google.com/file/d/1UH2fCuUVjb_ErG6MWYBF0YVivaFYoXBN/view?usp=sharing
- 2 これらの発表のさらに踏み込んだ内容については、前述の *Cahier*33号参照のこと。
 Clonz 氏、鈴木氏、佐藤氏については、以下の優れた論文も参照のこと。
 Charlène CLONTS, « La “poésie pratique” de Ghérasim Luca », 『フランス文学論集』、第56号、pp.15-32, 九州フランス文学会、2021年。
 鈴木隆美、「アルトーにおける舞踏のイメージ」、『フランス文学論集』、第56号、pp.1-14, 九州フランス文学会、2021年。
 佐藤典子、「検死される作者：作者の意図をめぐる美学者たちの論争」、『言語文化論究』、第51巻、pp.19-29, 九州大学大学院言語文化研究院、2023年。
- 3 こうした無コンテキスト状況が現れる以前、アルチュセールはその多彩な活動にもかかわらず、限定された枠組みの中で扱われてきたように思われる。当初は主流的なマルクス主義者たちからは、疑わしき理論家とみなされた。またカルチュラル・スタディーズから注目を浴びた時は、政治的な文化理論家としての側面が強かった。いずれも彼が当初から問題としてきた、テキストに対する読解という行為が持つ意味という視点が強調されることは多くはなかった。そうした方向からは、アルチュセールがスピノザ、マキャヴェリに注目し続けてきたことは抜け落ちることとなったし、『フランカへの手紙』などが重要な資料として積極的に利用されることも少なかった。こうした傾向が変わるためには、デリダ読解に東浩紀が、ドゥールーズ読解に千葉雅也が登場したような状況が必要のように思われる。
- 4 ここで言うドラマ方式とは、歴史主義と言い換えられるかもしれない。歴史主義に対する批判については以下も参照。
 ルイ・アルチュセール、『不確定な唯物論のために——哲学とマルクス主義についての対話』pp.154-157、大村書店、1993年。
- 5 トポロジックな分析としては、たとえば以下参照。
 Alain Grosrichard, « “Ou suis-je ?” “Que suis-je ?” Réflexion sur la question de la place dans l’œuvre de J.-J. Rousseau, à partir d’un texte des *Rêveries* », *Rêveries sans fin*, p.31, Paradigme, 1977.
- 6 こうした問題意識は、すでにフーコーが『言葉と物』の最後のところで述べていたことから明らかであろう。フーコーはその著作を通じて、決して新しい人間像や人間観を提示しようとしたわけではなかった。
 Michel Foucault, *Les mots et les choses*, Gallimard, p.398.
 ミシェル・フーコー、『言葉と物』p.409、新潮社、1974年。